

虫とわたし
第1回

長虫

車谷長吉

私は播州飾磨しつかまの在所の百姓の倅せがれである。家の東側、南側は田んぼだった。恐らくそのせいで、家の中、庭には蛇がたくさんいた。「うち家ねえには、なんでこない蛇が多いんやろ。」と、母がよく嘆いていた。夜、布団の中で眠っていると、青大将が私の顔の上を這って行くこともあったし、祖母が夜中に庭便所へ行こうとして、畳の上で縞蛇を踏みつけ、ために体に巻きつかれ、悲鳴を上げたこともあった。

私方では養鶏もしていた。すると鷄いたちがよく卵を盗みに来た。前足二本で卵を抱え、逃げて行くのである。これはよいのであるが、夜中に蛇が卵を盗みに来ると、困った。蛇は鶏の頸くびに巻きつき、絞め殺そうとするのである。鶏は物凄いい悲鳴を上げる。家族の者はこの悲鳴で目が醒め、走って行く。仕方がないので、弟が草刈り鎌で蛇の頸を切り落とす。落ちた頸はまだ動いている。蛇の胴体を鶏から取り外し、頸といっしょに弟が近くの堀へ捨てに行く。

私は三十八歳の夏、二度目に東京へ出てきたが、その日の朝、玄関前で父、母と話

していると、庭の檜かしの木に蛇がぶら下がっていた。私の生家では珍しくない光景であるが、忘れられない。いや、私は物心ついた頃からよく蛇を見たが、その場所はすべて記憶の中で鮮明である。東京へ出て来ると、白山薬師坂***の上のアパートに入居した。このアパートの裏は崖で、雑草がおい繁っていて、台所の窓からよく蛇が部屋の中へ入って来た。私は頸を掴んで、また崖へ戻してやった。斜め前の家の垣根の木にも、よく蛇がいた。こちらの方は喉を撫でてやると、喜んでいた。

蛇のことを長虫とも言うのは、深澤七郎『榎山節考』を読むまでは知らなかった。

夏はいやだよ

道がわるい

むかで ながむし

山かがし

作品の末尾に深澤作詩作曲の「榎山節」が載せてあるのである。日本列島に住む蛇は、沖繩列島のはぶ、九州以北の蝮、以外はすべて無毒である。

* 播州飾磨……今の兵庫県姫路市飾磨区

** 白山薬師坂……東京都文京区白山



撮影・庄司直人

車谷長吉（くるまたに ちようぎつ）

小説家。1945年兵庫県生まれ。会社勤めのかたわら、1972年、短編小説『なんまんだあ絵』を発表。1992年、はじめての短編集である『鹽壺の匙』を刊行し、芸術選奨文部大臣新人賞と三島由紀夫賞を受賞する。1998年、長編小説『赤目四十八瀧心中未遂』で直木賞を受賞。同作は、2003年に映画化された。2001年、『武蔵丸』で川端康成文学賞を受賞。妻は詩人の高橋順子氏。